

板橋の渋沢栄一養育院長銅像の数奇な運命

稲松 孝思

東京都健康長寿医療センター

板橋区大山の東京都健康長寿医療センターに、渋沢栄一の巨大な銅像がある。養育院運営、社会事業に対する渋沢の貢献をたたえるものである。銅像などについて一部に流布している誤報を是正するため、養育院の経過、銅像の辿った数奇な運命について述べる。

1. **養育院創立の経緯**：江戸幕府の大久忠寛（後の東京府知事大久保一翁）は蕃書調所総裁の時、七分積金（松平定信による救荒基金）による西洋式小石川養生所の建設を目指して「病幼院創立意見」を提出した。維新後は、静岡藩立ち上げに尽力していたが、廃藩置県の後上京し、東京府知事に就任。1872（明治5）年に営繕会議所（町会所を改組）に対して救貧策を諮問し、共有金（江戸時代の七分積金）により「養育院」を創立した。この頃、ロシアのアレクセイ大公（皇太子ではない）が訪日し、その対策として街の浮浪者を仮収容したのが養育院のはじめの業務となった。渋沢栄一は、1874（明治7）年から営繕会議所に関与し、その後養育院長となり、半世紀以上にわたって維持発展に尽力した。養育院本院は上野、神田、本所、大塚と引っ越しを繰り返し、関東大震災直後、板橋に越した。当時関連施設を含めて2000名以上を収容する巨大な公的救護施設となっていた。板橋施設の建設が一段落したとき、市民の寄付による銅像が計画された。ご当人はいやがっていたが、『この銅像は単に過去の養育院長としての功績を記念するのではなく、終始、渋沢の念頭を離れない養育院の構内に、百年の後も永久にこれを守護せんとする渋沢子爵の魂魄のため、定住所をお作り申し上げる意味もある……』との説得に承諾されたという。帝展・文展審査員の彫刻家、小倉右一郎の制作になる、高さ16尺（4.3m）、方20尺（5.4m）の花崗岩の台座に、高さ10尺（3.75m）、重量480貫（1.8t）の青銅製の銅像で、フロックコート姿でソファーに座っている。その落成式で、銅像を背にしてご本人が謝辞を述べている。

2. **出征報道**：1943（昭和18）年12月21日、戦時の金属回収の対象として台座から降ろされ、作業の写真が翌日の読売新聞に“慈父渋沢さんも征く”と報道されている。コンクリート代替像が作られ、本体は防火壁の横で搬出作業を待った。昭和20年4月の城北大空襲で、板橋施設はB29による焼夷弾爆撃を受け、利用者107名が死亡した。代替像も焼け焦げたが、本体は出征しないままに温存された。

3. **移築再建**：戦後板橋区による養育院再建反対運動があったが、GHQの介入で土地の一部を学校や公園などのため板橋区に移管した上で、1955（昭和30）年養育院施設を再建して銅像も移動した。更に2年後、当時ご存命の作者小倉右一郎監修で銅像を修復した。

4. **養育院記念中央ひろば**：1975（昭和50）年に銅像は引っ越し、養育院記念中央ひろばが整備された。1999（平成11）年に東京都の組織改編により「養育院」の組織名は消失。2002（平成14）年、黒いブロンズ色の銅像は、酸性雨、ハトの糞などで汚れや痛みが目立つために塗装工事が行われた。エポキシ樹脂、アクリル・ウレタン、フッ素樹脂の3層に保護膜が塗られ、鳩の糞が目立たない灰色になった。2013（平成25）年、地方独立行政法人・東京都健康長寿医療センターの新施設が建設された。この時、旧職員を中心とする「養育院を語り継ぐ会」により、渋沢の墨蹟を残した本院跡碑が作られた。また、寛永寺から移設されていた徳川家光・家斉墓前の石灯籠と、位置が変更された銅像などにより、ひろばが再整備された。2014（平成26）年、板橋区教育委員会により登録有形文化財（歴史資料）に登録され、案内板が設置された。